

「そこで生まれて、そこで生きて、そこで死ぬ」。それが人生の幸せなのかもしれない。離れたくなくても、故郷を離れなければいけない人もいる。故郷を離れた男は祭の日に故郷へ戻る。故郷には事件が待っている。寅さんや、大衆演劇の股旅物や時代劇や西部劇のテーマである。事件を解決して男はさすらいの旅に出る。「シエーン、カムバック」。女は離れて生き

る土地を故郷にする術を知っている。女は離れた土地の言葉にもすぐに馴染む。亭主の親類縁者との人間関係も上手く構築する。付かず離れずの鼻肩なしの人間関係である。鼻肩はあるのだが、それを隠して上手く付き

る。少年時代の星鹿の味である。かんころは薩摩芋を薄く輪切りにしてゆがき、天日に干したものである。昔、星鹿には煮干やかんころを干した莫座がここに敷いてあり、壮観であった。餅米とかんころを蒸したものが

いまでも博多に着くと、博多駅の地下でラーメンをすすする。筑肥線の駅のホームなら立ち食いの素うどんである。「ああ、帰って来たはい」である。星鹿の女の人のかんころ餅を蒸かすのが上手かった。

亭志ん生の落語を聴いた。帰りには敷そばで天ぶらそばを食った。また「歌舞伎座では団十郎の歌舞伎を観た。帰りは銀座で寿司を食った」とも言った。自慢したわけでもないだろうが自慢気であった。東京で寿司といえは握り寿司である。松浦では寿司といえは押し寿司か巻き寿司である。「俺が大衆演劇を観ていた頃に、こいつは歌舞伎を観ていたのか」。私の嫉妬心と劣等感に火がついた。私が星鹿でかんころ餅をかじっていた時代に、東京生まれの友人はすでに握り寿司を頬張っていたのである。「松浦を書かなければ」。その日が松浦を振り返った日でもあった。(松浦市出身)

書く、そう思った日

合つのが村社会の人間関係である。姉妹とは疎遠になる。「兄弟は他人のはじまり」

かんころ餅である。年寄りになると味も少年時代の味に戻りたくなるのかもしれない。

東京生まれの友人が「俺は5、6歳の頃から、おじいちゃんに連れられて神田の末広亭で古今

おかべ・まごうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在任。70歳。



女は土地の味にもすぐに馴染む。食い物は土地の文化である。雑煮から味噌汁までも土地土地の文化の味付けがある。近頃、よくかんころ餅を食いたくなく

おかべ・まごうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在任。70歳。

おかべ・まごうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在任。70歳。

おかべ・まごうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在任。70歳。